book INFORMATION

昨今、関心が高まり、関連書籍の出版も相次いでいるBOPビジネス。本書は「パートナーシップ」を謳う副題の通り、「異業種」の著者3人がそれぞれの立場からのアプローチを試みている点でユニークだ。

国際ビジネス論を専門とする北海学園大学の菅原秀幸教授は、「BOPビジネスとは貧困をビジネスで解決するという今日の非常識を明日の城識に変える一歩」であり、キーワードは、見方、考え方、ビジネスモデルのすべてにおける「different」だと述べた上で、「これまで途上国から搾取し犠牲を強いてきた企業帝国主義が、装い新たにBOPビジネスと名前を変えて途上国からの搾取をねらって再び登場してきたわけではない」と強調する（第1章）。さらに、今日のBOPビジネスに通じる使命感と企業家精神を持った経営者は、実は第二次大戦後の日本に存在したと述べ（第4章）、今日新たな挑戦を始めている中小企業の取り組みを紹介する（第5章）。

開発の立場に立つ政策研究大学院大学の大野泉教授は、格差が拡大しミレニアム開発目標（MDGs）の達成が危ぶまれる中、開発関係者も資金量と持続性の観点からBOPビジネスに注目していると述べ、様々な公的支援制度を紹介。その上で、開発関係者の強みは、民間セクターがビジネス・投資を行う際にビジネス環境を整備したり、コミュニティーとつなぐ際に生かされることを指摘し、様々な関係者が強みを持って協働することを呼びかける（第2章）。第6章では、開発プロジェクトがBOPビジネスにつながった事例として、エチオピアにおけるJICAの森林保全プロジェクトも紹介する。

日本総合研究所の槌屋詩野研究員は、欧州と途上国の現場でBOPビジネスの最前線に身を置く立場として、両社会における議論を比較。BOPビジネスを「中間所得層の次」として捉えがちな日本企業に対し、欧米企業は現地の優秀な人材を確保できるなど、金銭価値に置き換えられない価値を生み出す場として捉えていることを明らかにし、「今までのネットワークでは絶対に出会うことのなかった不思議な繋がりを運命的にもたらす」BOPビジネスを通じ、日本企業もイノベーションを恐れず高みを目指す組織であってほしいと期待を寄せる（第3章）。

東日本大震災後の新しい日本創生にも示唆を与えるパートナーシップ論である。　（本誌編集部：玉懸 光枝）

BOPビジネス入門
—パートナーシップで世界の貧困に挑む—
菅原秀幸／大野泉／槌屋詩野 共著
中央経済社
本体2,200円＋税

都市を生きる人々
バンコク・都市下層民のリスク対応

遠藤 環 著
京都大学学術出版会
本体4,000円＋税

バンコクのスラムなどで、不安定な職につきながら生きる貧困層の人々。彼らは常に火災や撤去、けがや病気などの危険にさらされており、社会保障制度も整っていない中で、何かあればとたんに収入を失うリスクを抱えている。人々はこのような状況下で、さまざまな創意工夫をしながら日々を生き抜いている。本書はバンコクで生きる人々およびコミュニティの、リスクを超える潜在力を描き出す。

西アフリカの教育を変えた日本発の技術協力
ニジェールで花開いた「みんなの学校プロジェクト」の歩み

原 雅裕 著　ダイヤモンド社
本体1,500円＋税

世界で最も貧しい国のひとつ、西アフリカのニジェール。同国は水源が乏しく、ウラン以外にめぼしい天然資源もないため、開発が遅れている。そんな国にとって唯一頼れるのが「人」であり、人を育てる教育環境の整備こそが、その国の発展を支える柱と言える。本書は教育を行政に任せきりにせず、住民参加型で行われた教育開発事業「みんなの学校プロジェクト」の、長く険しい道のりの記録だ。

脱「国際協力」
開発と平和構築を超えて

藤岡 美恵子、越田 清和、中野 憲志 編
新評論
本体2,500円＋税

「国際協力」とは何か。今までその多くは、国家や国際機関など“援助を実施する側”の視点から語られてきた。本書は“援助をされる側”の視点、個人や先住民族、マイノリティなどの視点から、開発と平和構築を論じていく。“開発”は構造的な貧困を生みだしていないか、“平和構築”は援助する側の都合による“人道的帝国主義”に陥っていないか。国際協力を根底から考え直していく一冊だ。